

YAKYUと平和・戦争

金子 由美

中村学園大学短期大学部幼児保育学科

概要

現在、多くのスポーツが世界中で盛んに行われている。その中でも野球は母国のアメリカを中心にキューバやドミニカ共和国等のカリブ海周辺の諸国、韓国や台湾等の東アジア等、多くの国や地域で行われている。また、その中でも日本は世界の野球人口の半分を占めており、非常に人気のあるスポーツ「YAKYU」となっている。しかしながら、YAKYUは平和や戦争に深く関わりながら発展してきたことも忘れてはならない。更に、オリンピックは現在では平和の祭典として親しまれているが、戦争中は様々な位置づけにおいて利用されたことも忘れてならないことである。そこで、本研究では戦争中および戦後におけるYAKYUやオリンピックの位置づけ、また、これらが人々に与えた影響について明らかにすると同時に、これからのYAKYUやオリンピックがどうあるべきなのかについて考察していく。

1 章 YAKYU

野球は世界中で行われているスポーツである。しかし、同じ野球でも世界各国で人気度や競技人口は異なっている。日本におけるYAKYUはWBC (World Baseball Classic) の2連覇に代表されるように、世界的にも高いレベルとなっている。そこで、この章では日本における野球の歴史や当初の野球と現在の野球との相違点等について述べ、また、野球の母国であるアメリカでの野球の位置づけ・競技人口・アメリカ野球の定義等について詳しく解説していく。

1.1 節 日本における野球の歴史

1873年(明治6年)、開成学園(東京大学の前身)のアメリカ人教師のホレエス・ウィルソンによって日本に初めて野球が紹介された。つまり、伊藤博文・岩倉具視・大久保利通などの明治維新の主役たちが日本を改革している最中、まだ飛脚がいたような時代に日本人は野球に出会ったのである。このころは、ユニフォームなどではなく和服に裸足で行われており、雨の日でも蓑を着て笠を被って練習したという逸話等もあり、これは当時の野球原人達の野球意欲は今日の草野球人に決して引けをとらないものであったことが伺える。

この頃の野球は、投手はすべて下手投げ、ストライクゾーンは打者が指定するという今と全く違う形で行われていた。これは日本人がそうしたのではなく、当時のアメリカの野球を見習った為である。アメリカで近代野球が確立するのは1901年であり、よって、日本の野球はアメリカの近代野球をそのまま輸入して発展したものではないということがわかる。

1877年(明治10年)、当時22歳の平岡熙によって日本で初めて社会人のクラブチームが誕生した。平岡氏は機関車製造技術を学ぶ為に1871年にアメリカに渡り、1877年に帰国して今の国土交通省に当たる工部省の技師となった。平岡によって設立されたクラブチームは「新橋アスレチッククラブ」という名前で、ユニフォームを着てプレーした最初の野球チームでもあった。その後、第一高等中学校や帝国大学の学生らによって野球が活発に行われるようになった。その一人に俳人の正岡子規がいる。一般には、「ベースボール」を「野球」と和訳したのはこの正岡子規であると言われているが、これは誤りで、彼の功績(後の野球殿堂入り)は幼名の「のぼる」を「野ボール」と引っ掛けて俳号に用いたことで「野球」という語の普及に貢献したことである。

実際の訳は明治 27 年に第一高等中学校 OB の中馬庚が行った。

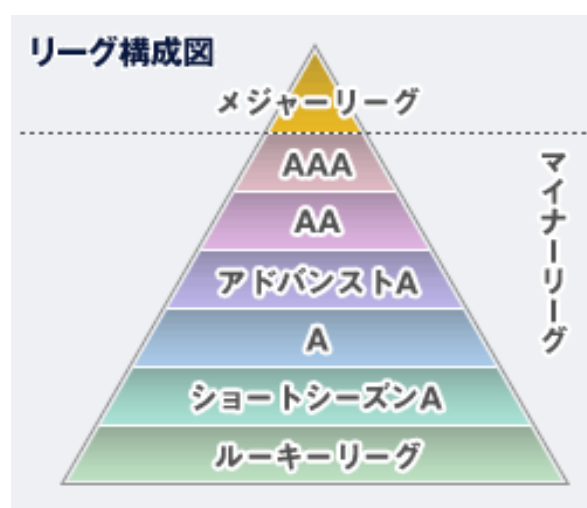
1.2 節 アメリカでは

アメリカでは、MLB(野球)、NFL(アイスホッケー)、NFL(アメリカンフットボール)、NBL(バスケットボール)が四大スポーツと呼ばれている。2003 年のハリス社(アメリカ)の好きなスポーツ調査によると、1 位・アメリカンフットボール (38%)、2 位・バスケットボール (17%)、3 位・野球 (13%) となっており、野球は母国アメリカで 3 番人気のスポーツとなっている。また、2002 年の Nielsen 社のレギュラーシーズンスポーツの視聴率ランキングにおいても、1 位・アメリカンフットボール (10.3%)、2 位・NASCAR (5.7%)、3 位・バスケットボール (2.9%)、4 位・野球 (25%) となっている。

それに対して、日本では野球は非常に人気のあるスポーツとなっている。例えば、アメリカに渡った松井選手・イチロー選手・野茂選手などの日本人選手の活躍が連日ニュースで報道され、また、日本のプロ野球のオフシーズンでも年俸契約・ドラフト・キャンプでの練習風景、そしてオープン戦までもがニュースとなっている。このように野球が日本において人気となっている理由は、ビールを飲みながらテレビ観戦するのにとても良い進行ペースであったり、サラリーマンが自分の生き方に似せて見ることができる等と考えられている。

現在、世界で競技人口が最も多いのはサッカーである。サッカーの競技人口がいる国の中でも FIFA (国際サッカー連盟) 国は 207 国で、その競技人口は 2 億 4000 万人である。つまり、世界で 25 人に 1 人はサッカーをしているということになる。一方、世界における野球の競技人口は 1200 万人で、その半数が日本人である。つまり、世界の野球競技人口のうち 2 人に 1 人が日本人ということである。

野球の母国であるアメリカでは、メジャーリーグの傘下リーグとしてマイナーリーグがある。階層化された構造を持ち、上位・下位のリーグ間でチームの入れ替えが行われるようなスポーツリーグとなっている。その中で最上位リーグはメジャーリーグと呼ばれ、下位リーグはマイナーリーグと呼ばれている。日本のサッカーリーグを例にするならば、J1 のメジャーリーグに対し、J2・JFL がマイナーリーグにあたる。以下の図は、メジャーリーグベースボール各球団の傘下には育成組織があり、それら下部組織が集まってマイナーリーグが形成されている。



マイナーリーグが日本プロ野球の 2 軍と違う点は、MLB の傘下チームであってもほとんどが独立資本であり、地域密着型の独立採算制の運営を行っているということである。

2 章 スポーツと戦争

今日、スポーツの祭典および平和の祭典として開催されているオリンピックでは、多種多様な競技が競われ、多くの感動が生まれ、世界中の人々に親しまれている。しかしながら、オリンピックが平和の祭典と言われるようになった理由には戦争が大きく関わっていることも事実である。そこで、この章では戦争中のオリンピックの状況について述べると共に、前章で述べたように現在日本でも親しまれている野球が戦争に及ぼされた影響について詳しく解説していく。

2.1 節 オリンピックと戦争

1916 年、オリンピックの第 6 回大会はドイツのベルリンで開催される予定であった。しかし、第一次世界大戦が始まり、開催は不可能となった。戦争が終わった翌年、クーベルタン国際オリンピック委員会（IOC）会長は、1920 年に開催されるオリンピックの開催地を決める為、5 年ぶりに IOC 総会を召集した。当時、ヨーロッパの国々はどこも戦争の深い傷跡を残しており、特に、ベルギーは大きな被害を受けていた。しかし、IOC 総会では「平和の祭典」をプレゼントすることを目的に、第 7 回大会の開催地に敢えてベルギーのアントワープを選んだ。結果、ベルギーの国民はその期待に応じて盛大なオリンピックとなり、アントワープ大会は史上最高となる 29 ヶ国から 2668 人の選手が参加し、23 競技 161 種目が行われた。アントワープ大会が 2 回目のオリンピック参加となった日本は、テニスに出場した熊谷一弥選手と柏尾誠一郎選手の活躍が注目された。シングルスでは熊谷選手が銀メダル、ダブルスでは熊谷選手と柏尾選手のペアで銀メダルに輝いた。この大会でスウェーデン射撃チームの一員として出場したオスカー・スパーン選手（大会当日の年齢は 72 歳と 280 日）のチームは、射撃ランニング・ディア（単発）で団体銀メダルを獲得した。スパーン選手は現在においてもオリンピック史上最年長のメダリストであり、また、最年長金メダリスト（第 5 回ストックホルム大会で獲得）として歴史に名前を刻んでいる。

第 8 回大会は、第 2 回大会の舞台でもあったパリを開催地として 44 ヶ国から 3070 人の選手を集め、19 競技 140 種目が実施された。この大会以前までは競技運営の連絡などには大きなメガホンが使われていたが、観衆の大歓声でかき消されて選手や役員に連絡や指示が行き届かないのが問題であった為、この大会からマイクロホンが使われるようになった。また、ベルリンで開催された第 11 回大会ではアドルフ・ヒトラーがベルリン・オリンピック大会組織委員会総裁に就任し、オリンピック史上初めての聖火リレーが行われた。レニ・リーフェンシュタール女史が監督したこの大会の記録映画が、1938 年のベニス映画祭で金賞を受賞した。

1932 年、オリンピックの第 10 回大会はロサンゼルスで開催された。現地でバロン西と呼ばれていた西竹一選手（男爵）はこの大会の馬術で優勝し、語学も堪能であった為、各方面の人々と親交を深めて優勝を祝福された。ロサンゼルス大会の 7 年後の 1939 年、第 2 次世界大戦が始まり、1945 年、西竹一男爵が戦車第 26 連隊長として着任していた硫黄島にアメリカ軍が上陸した。敗色濃厚な日本軍の中にバロン西がいることを知ったアメリカ軍は「バロン西、貴下はロサンゼルスで限りなき名誉を受けた。降伏は恥辱ではない。われわれは勇戦した貴下を尊敬を持って迎えるだろう」と呼びかけた。しかし、多くの同胞と共に西竹一男爵は戦死した。アメリカと日本、双方に多くの犠牲者を出した硫黄島での戦いは、後に『父親たちの星条旗』と『硫黄島からの手紙』として映画化された。

2.2 節 YAKYU と戦争

日本は、1940 年から 1944 年の間、戦時体制に突入した。この頃のプロ野球は常に戦争と共に語る必要がある。例えば、多くの球団がカタカナ名から漢字へと名称が変更されたり、当時外国人選手として活躍していたスタルヒン選手も敵性外国人選手と判断され、日本名「須田博」へと

改名を命じられた。加えて、太平洋戦争突入後の昭和 18 年にはアウトやセーフ等の野球用語も「よし・だめ」等の日本語化が推し進められ、更に、ユニフォームの色が国防色のカーキ色へと変更された。（現在は同色系のユニフォームは禁止されている。）太平洋戦争が近づきつつある時代背景を考慮すると、英語排斥の一つと考えられるであろう。また、戦争はプロ野球選手の選手生活にも大きな影響を及ぼした。具体的には、プロ野球の試合開催が土日に限定され、平日に選手は軍需工場で働く産業戦士として勤務することになったり、更に、試合中もヘルメットの代わりに戦闘帽を被り、傍目に見てスポーツ選手には見えない風貌となっていた。

昭和 19 年 9 月 26 日、公式戦が打ち切られ、同年 11 月 13 日、「切迫する時局にかんがみ一時休止」の宣言と共に戦前のプロ野球は幕を下ろした。

太平洋戦争は多くの傷跡を残し、多くの日本人が亡くなった。そして、その中には多くのプロ野球選手も含まれている。その一人に沢村栄治投手がいる。沢村は日米野球における一失点という快投劇やノーヒットノーランを 3 度も達成する等、現在のプロ野球界にも「沢村賞」の名が残る名投手であった。特に、3 度目のノーヒットノーランは戦争による負傷で満足に投げられなかった状態にも関わらず達成した素晴らしい記録として現在にまで語り継がれている。昭和 18 年 10 月 24 日の打席を最後に昭和 19 年 12 月 2 日、プロ野球創成期の偉大な投手は享年 27 歳、台湾沖で帰らぬ人となった。

3 章 スポーツと平和

現代のスポーツ競技は近代的なトレーニング方法やトレーニング機材によって非常に高いレベルのものとなっており、アスリート達のレベルの高いプレーは多くの人々を喚起させ、感動させている。特に、オリンピックは世界最大のスポーツイベントであるが、同時に、世界平和への国際貢献活動の 1 つとして大いにその役割を担うものとなっている。また、日本の YAKYU は戦後復興の大きな原動力となり、疲弊しきった人々に大きな力を与え、現在でも多くの子ども達に夢と希望を与えている。このように、スポーツは多くの人々に夢や希望を与え、社会に大きな力を与えている。そこで、この章ではオリンピックや YAKYU が社会に対して、そして、平和に対してどのように影響しているかについて解説していくことにする。

3.1 節 オリンピックと平和

オリンピックは別名スポーツの祭典と呼ばれ、夏・冬それぞれに 4 年に 1 度開催されている国際総合競技大会である。オリンピックの主催者は国際オリンピック委員会（IOC）であり、IOC に加盟する国内オリンピック委員会（NOC）の数が国連加盟国数を上回っていることが示すように、オリンピックはスポーツをテーマとした平和活動の為の壮大なコミュニケーションの場となっている。また、オリンピックは百有余年という歳月と共に 2 度の世界大戦、東西冷戦問題等のその時々の国際情勢、そして、大会の肥大化、商業化、プロ・アマ統一化等の諸問題を抱えながらも世界の多くの人々に夢と感動と希望を与え続け、今日において世界最高のスポーツ大会として揺るぎない地位を確立したといっても過言ではない。そして、オリンピックは競技スポーツ分野における世界の頂点に位置するものであり、それぞれの国と地域を代表する選手の最高のパフォーマンスはその選手が代表する国と地域の人々に活力を与えるものである。更に、生活の中に広く浸透しているスポーツに対する関心を高め、スポーツの普及・発展に好影響をもたらしている。加えて、スポーツ人口の広がりやスポーツを支持する基盤となり、この基盤に支えられたスポーツ愛好者の中から素質に恵まれた素材をより多く発掘して、選手の強化、競技力の向上に取り組む、世界の頂点で活躍する選手を育成へと繋がっている。

オリンピックでの活躍はスポーツの振興との相互の連鎖作用により初めて成り立つものである。

このオリンピックの基盤となるスポーツは、健康・体力の保持増進や身体を動かすことによる充足感、爽快感、連帯感等の精神的充足をもたらし、明るく豊かで活力に満ちた社会の形成に寄与しており、先端的な学術研究や芸術活動と共通する人間の可能性の極限を追求する世界共通の文化的行為として位置づけられ、国や民族を超えた相互理解を促進するものである。

1998年2月、今世紀最後の冬季オリンピックとなった第18回オリンピック冬季競技大会が長野市を中心に開催された。長野冬季大会は日本国内では札幌冬季大会以来26年ぶりとなるオリンピックであり、「愛と参加」「美しく豊かな自然との共存」「平和と友好」を大会の基本理念として開催された。長野冬季大会は開催を契機に経済不況に苦しむ日本国内に絶大な経済波及効果をもたらす等、オリンピックを開催する地方自治体や国にとって更なる経済発展を遂げる大きな契機となる反面、開催都市並びに開催国に財政問題、環境問題、大会終了後における競技施設の維持・管理を含めた後利用問題等、大きな難問を残していることも事実である。しかし、オリンピックはスポーツの持つ国際性・価値観を生かして国や民族を超えた相互理解を促進する等、国際友好親善や世界平和に貢献するものである。

オリンピックの主催者であるIOCは、オリンピック大会の会期中は戦闘を停止するよう求める「オリンピック停戦」の決議を紛争当事国である国連加盟国に働きかけ、1993年から各大会前に国連総会において全会一致で採択されている。オリンピック停戦は「聖なる停戦」とも言われ、古代オリンピックの時代に神聖な祭典への参加を妨げてはならないという考えにも繋がっている。長野冬季大会の前年、シンクロナイズド・スイミングの小谷実可子氏が民間人として初めて国連総会に出席して、各国代表を前に「オリンピック停戦」をテーマにオリンピックの世界平和への貢献についてスピーチを行った。1990年10月、財団法人日本オリンピック委員会(JOC)は、JOC理念として「JOCの使命は全ての人々にスポーツへの参加を促し、健全な肉体と精神を持つスポーツマンを育て、オリンピック運動を力強く推進することにある。オリンピックを通じて人類が共に栄え、文化を高め、世界平和の火を永遠に灯し続けることこそ、JOCの理想である。」と制定している。このように、オリンピックは世界最大のスポーツイベントであるばかりではなく、まさしく世界平和への国際貢献活動の1つとして大いにその役割を担うものとなっている。

3.2 節 YAKYU と平和

日本では、「平和」と名の付く野球場が多く存在しているが、その背景には第二次世界大戦が大きく関係している。例えば、1972年に閉鎖された横浜公園平和野球場は1929年に関東大震災復興記念事業の一環として建設されたが、第二次世界大戦が激化した1942年9月に使用が停止され、横浜俘虜収容所として開設された。第二次世界大戦中の収容所としては、東京地区の川崎俘虜収容所(後に東京第一分所)、品川俘虜収容所(後に東京本所)と並んで、最も早い時期に開設された収容所である。1942年9月15日、捕虜225名(英、加、米)が収容され、9月25日に東京俘虜収容所第2分所と改名された。そして、11月中旬にはフィリピンから移送されたアメリカ兵73名が収容され、翌年年8月1日に東京俘虜収容所第3分所と改称された。尚、「東京第2分所」という名称は、のちに川崎市扇町の収容所の名称となった為、一般的には「横浜収容所」または「横浜球場収容所」と呼ばれていた。

このように、前章を含めて戦前戦中を通して野球と戦争には深い関連がある。しかし、同時にYAKYUは戦後復興に大きな役割を担ったことも忘れてはならない。

長嶋茂雄選手や王貞治選手は戦後の日本で活躍した野球選手である。特に、長嶋選手は第二次世界大戦後の日本野球界最大のスターであり、「ミスター・プロ野球」の意から「ミスター」の愛称で現在においても多くの人から親しまれている。長嶋選手は現役時代、1958年から1974年まで巨人で活躍し、日本シリーズにおける記録やオールスターゲームの日本記録など多くの記録を保持している。そして、当時「王貞治は記録に残る名選手、長嶋茂雄は記憶に残る名選手」と言われ、王選手と共に「ON砲」と呼ばれた。

長嶋選手の打者としての素晴らしさ動物的直感力にあると言われ、日本球史に残る大捕手の野村克也選手も「普通の打者は投手のコースや球種を読んで打席に立つものだが、長嶋は来た球を打つ天才だった」と脱帽している。また、長嶋選手独特の人間離れした鋭い勘は「コンピューター」と称され、それは舞台が大きくなればなる程研ぎ澄まされた。加えて、長嶋選手は守備の華麗でも有名であり、常に魅せるプレイを心掛け、それが人々に希望や夢を与えたのである。引退後もその群を抜いたカリスマ性は衰えず、監督となっても何かと話題を提供し続け、現役時代を知らない世代にさえ存在を知らしめ、1988年に殿堂入りとなり、背番号3は巨人の永久欠番となっている。そして、長嶋選手の後輩である王選手も現在においても通算本塁打868本の世界記録に代表されるように、厳しく自己を鍛錬し続けた球史に残る大選手である。この二人の活躍は疲弊した戦後日本に多く夢や希望を与え、それが戦後復興の大きな原動力となったのである。

最近の日本プロ野球では、2004年にプロ野球史上最大の危機と言われた業界再編問題などがあったが、前章でも述べたように、世界における野球の競技人口1200万人の半数が日本人であることから分かるように、YAKYUは現在においても一番人気のスポーツである。更に、戦後復興の原動力となった日本のYAKYUは世界へと羽ばたき、イチロー選手・松井秀喜選手・松坂大輔選手など多くの日本人野球選手が日本国内だけでなく、野球の母国であるアメリカメジャーリーグにも活躍の場を広げ、多くの子ども達に夢と希望を与えている。

まとめ

これまで述べたように、YAKYUは古くからの歴史があり、現在日本でも多くの人々から親しまれている人気あるスポーツである。しかし、YAKYUは戦前・戦争中・戦後に多くの影響を及ぼされ、同時に戦後復興の大きな原動力となり、日本に大きな影響を与えたことも忘れてはならない。また、オリンピックも戦争中に開催不可能となったこともあり、平和の祭典と言われるようになった理由には戦争が大きく関わっていることも事実である。しかしながら、オリンピックは世界最大のスポーツイベントであると共に、世界平和への国際貢献活動の1つとして大いにその役割を担うものとなっている。このように、YAKYUやオリンピックは戦争・平和と深い関わりがあり、互いに影響を与え与えられてきた。戦争はこれからも決してあってはならないものであり、世界平和を続けていかなければならない。その為にも、YAKYUやオリンピックを通して多くの人々に感動を与え、多くの子ども達に夢と希望を与え続けていくことが必要なのである。

おわりに

この論文は中村学園大学短期大学部 幼児保育学科 橋本弘治研究室において2008年から2011年に作成した卒業研究論文です。当研究室では卒業研究論文集を「幼児保育」と中村学園の学園祖 中村ハル先生の遺訓「努力の上に花が咲く」を組み合わせ「中村学園大学短期大学部「幼花」論文集」（以下、「幼花」論文集と記す。）と名付けております。但し、これは中村学園大学短期大学部としての正規の発行物ではありません。「幼花」論文集は当研究室にて作成した卒業研究論文の論文集です。

卒業研究論文は2008年より当研究室のホームページにて概要のみを公開しておりました。また、「幼花」論文集は卒業生への配布を目的として、基本的には非公開を前提として、パスワード保護により当研究室のホームページよりリンクしておりました。但し、個別にお問い合わせを頂いた教育・研究機関の関係者にはご理解頂いた上でお渡ししております。

この度、2018年8月現在においてパスワード保護が何らかの理由で解除され、「幼花」論文集が一般公開されている事実を確認いたしました。この事実に関しまして、ホームページを公開する者として管理不行き届きがありましたことを心よりお詫び申し上げます。

これまでリンク元である当研究室のホームページより論文へアクセスされた方はご理解された上でご覧いただいていると思いますが、それ以外の経路により直接論文へアクセスされた方には誤解を生じる論文集の名称であることから、この度、この文面を「幼花」論文集のすべてに追記することにいたしました。また、これまで卒業生への配布と総合演習（卒業研究）発表会での使用を前提としておりましたので、著作権表示として「中村学園大学短期大学部」と表記しておりましたが、「お問い合わせ先」と変更しております。尚、「幼花」論文集の詳細についてはリンク元である当研究室のホームページをご覧ください。

<http://www.nakamura-u.ac.jp/~hashimot/members/members.html>

「幼花」論文集は保育・幼児教育を中心として、保育者を目指す学生が真摯に取り組んだ卒業研究の成果集です。当研究室としましては、この「幼花」論文集が教育・研究をはじめとして、子ども達を取り巻く環境改善の一助となることを希望しております。

上記をご理解の上、本文をご覧くださいますようお願いいたします。

2018年8月8日
中村学園大学短期大学部
幼児保育学科 橋本弘治